

スウェーデンにおけるインクルーシブ教育と知的障害特別高校の意義・役割：ストックホルムの聖エリク特別高校の訪問調査から

著者	田部 絢子, 石井 智也, 石川 衣紀, 内藤 千尋, 能田 昂, 池田 敦子, ?橋 智
雑誌名	尚絅学院大学紀要
号	82
ページ	97-109
発行年	2021-12-23
URL	http://doi.org/10.24511/00000553

スウェーデンにおけるインクルーシブ教育と 知的障害特別高校の意義・役割 ーストックホルムの聖エリク特別高校の訪問調査からー

田部 絢子*・石井 智也**・石川 衣紀***・内藤 千尋****・
能田 昂*****・池田 敦子*****・高橋 智*****

Inclusive Education and Significance/Role of Special High Schools for Students with
Intellectual Disabilities in Sweden : From a Visit Survey of St. Erik Special High School
(St Eriks Gymnasiesärskola) in Stockholm -

Ayako Tabe, Tomoya Ishii, Izumi Ishikawa, Chihiro Naitoh,
Subaru Nohda, Atsuko Ikeda, Satoru Takahashi

「北欧福祉国家と子ども・若者の特別ケア」研究チーム（代表：高橋智日本大学文理学部教育学科教授・東京学芸大学名誉教授）は、1994年から四半世紀以上にわたり北欧福祉国家（スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド）を調査訪問（全23回）して、多様な発達困難を有する子ども・若者の発達支援・特別ケアのあり方について日本との比較研究を行ってきた。本稿ではその一環として、2020年3月に実施したスウェーデン・ストックホルム市内にある公立高校に併置された聖エリク特別高校の訪問調査を通して、スウェーデンにおけるインクルーシブ教育のもとでの知的障害特別高校の取り組みとその意義について検討した。

スウェーデンの知的障害特別高校の教育は大人の生活への準備期間として位置づいており、知的障害がある子どもにとって進路選択は容易ではないため、知的障害特別高校は通常高校よりも1年長い4年間の修学年限が保障されている。聖エリク特別高校では、他の特別学校のように落ち着いた環境のなかで生徒の状態や学習ニーズに応じたプログラムが実施されていた。また通常の高校と併置されていることで相互交流や理解を通して成長・発達の機会が提供され、インクルーシブ社会に繋がる教育が行われていた。しかし、特別高校では就労をめざした教育プログラムが実施されているものの、それが卒業後の進路・就労に繋がっていない現状が大きな課題である。

またMineur (2015) が指摘するように、特別高校に通う知的障害生徒は自分たちが受けている教育を主流の教育システムよりも価値が低いものと認識し、この問題は特別高校の教育が高等教育進学に必要な資格を提供しないということにも関連している。これは特別学校に係る排除の問題の例示でもあり、特別高校がスウェーデンのインクルーシブ教育や「A School for All」のビジョンと一致していないことを示唆している。それゆえに特別高校が、知的障害を有する高校生の学びの場として最適な場となり得ているのかどうかについて検証が不可欠である。

キーワード：スウェーデン、知的障害、特別高校、インクルーシブ教育

2021年10月7日受理

*金沢大学 人間社会研究域学校教育系 准教授

**東海学院大学 人間関係学部 専任講師

***長崎大学 教育学部 准教授

****山梨大学 教育学部 准教授

*****尚絅学院大学 総合人間科学系 教育部門 助教

*****東海学院大学 人間関係学部 教授

*****日本大学 文理学部教育学科 教授

1. はじめに

現代の急激な社会構造の変化や家庭の経済的格差や養育困難の拡大、子どもの迷い・失敗などの試行錯誤を待てない社会の非寛容さや学校の厳しい管理統制のもとで、子どもは日々、多様な不安・緊張・抑うつ・ストレスを抱えながら現代を生活している。

とりわけ高校生は、対人関係はもとより、進学や就職という進路面に強い不安を感じている。竹本ほか（2016）が「多様な困難を抱える高校」において、在学中に発達困難や被虐待・心理的不安定等を有した卒業生に対して聞き取り調査を実施したが、そのなかで「本当は学校に行きたかった。アルバイト先での賄い飯を食べるために、学校よりもアルバイト先を選んだ」等の声が挙げられていることを指摘した。在学中に顕著な生活困難に直面し、学業にしっかり取り組むことや、将来について考える機会がなかったことが明らかにされている。

こうした現状から、進学・就職に必要な能力を高めることにとどまらず、子どもが自分の将来や生き方・職業を検討しながら自立・社会参加をめざすことができるような高校教育のあり方を検討していくことが求められている。それは発達困難や障害を有する高校生においてはよりいっそう緊要な課題となっている。

なお日本では、特別支援学校高等部の分校・分教室を通常高校の中に開設する方法がとられてきているが、それは高校教育におけるインクルーシブ教育の促進ということよりも特別支援学校の教室不足がその背景としては大きく、高校側の空き教室を利用した開設方法による学習環境の未整備・不全等の課題も大きく残っている状況である。

上記の点をふまえながら本稿で取り上げるのは、スウェーデンの知的障害特別高校の取り組みである。スウェーデンの知的障害特別高校の教育は大人の生活への準備期間として位置づいており、知的障害がある子どもにとって進路選択は容易ではないために、知的障害特別高校は通常高校よりも1年長い4年間の修学年限が保障されている。

それゆえに本稿では、2020年3月に実施したスウェーデン・ストックホルム市内にある公立高校に併置された聖エリク知的障害特別高校（St Eriks Gymnasiesärskola）の訪問調査を通して、スウェーデンにおけるインクルーシブ教育のもとでの知的障害特別高校の取り組みとその意義について検討する。

なお、聖エリク特別高校の調査協力者に対しては事前に文書にて「調査目的、調査結果の利用・発表方法、秘密保持と目的外使用禁止」について説明し、承認を得ている。

2. スウェーデンにおける特別高校システム

スウェーデンでは、高校教育においても障害や多様な発達困難を有する若者に特別教育プログラムを提供し、インクルーシブ教育や発達支援の発展に寄与してきた（高橋ほか：2018）。高校教育においては多様な教育プログラムを通じて、本人の学習のつまづきを明らかにし、それを克服できる機会の提供が大事にされている（本所：2016）。例えば、重度知的障害のある生徒には9年または10年の義務教育を受けたのち、4年間の後期中等教育を受ける権利が保障されている。

スウェーデンの後期中等教育においては3年制の総合制高校（gymnasieskola）および4年制の特別高校（gymnasiesärskola）が設置されている。1971年以降、「職業学校（yrkesskolor）」

が「総合制高校 (gymnasieskola)」に統合され、それに伴い「職業特別学校 (yrkessärskola)」も「特別高校 (gymnasiesärskola)」へと改組された。特別高校は知的障害を有する生徒、特別基礎学校を卒業した生徒を対象とした高校であり、16歳から20歳を対象としており、21歳から23歳まで就学期間を延長することができる。なお、スウェーデンでは特別学校を通常学校と同じ敷地内に設置する「場の統合」の形態がとられているが、特別高校も総合制高校の敷地内に設置されることが多い(高橋ほか：2018)。校外学習、生徒会 (Elevråd)、文化祭、様々なプロジェクト学習などの活動では、隣接する通常高校の授業にも参加する、もしくは共同で学習活動を行うこともある。こうした活動を通して在籍生徒は「学校全体に通っている友人と出会うことができる」「重要なことを学ぶことができる」との感想を述べている (Gymnasiesärskola.se ウェブサイトより)。

高校のカリキュラムでは、各生徒の前提条件とニーズに対応するための特別支援の措置に関する規定がある。これによれば生徒がナショナルカリキュラムに定められた学習目標を達成できない場合または他の理由で特別な支援を必要とする場合に特別措置が提供され、各生徒の個別サポートプログラムの作成について校長が責任を負うこととされている。このような支援を必要としている生徒のために教室での特別な指導が組織されたり、病気などの理由で通常の学業に参加できない生徒には病院・自宅または別の適切な場所で特別な指導が行われている。

特別高校の教育目的は「生徒の発達に応じて学習を深め、人権として保障されている労働・生活・余暇を有意義にすることをめざす」ことにある。そのために職業教育とともに、日常生活や余暇活動の充実をはかるプログラムが準備されており、生徒の興味・関心を把握し、モチベーションを高めていくことが大切にされている(高橋ほか：2018)。知的障害特別高校は卒業後や大人の生活をめざして準備をする期間の教育である。各生徒には学校での支援と家庭との連携を行う指導教員 (elevhandledare) がおり、各学級には授業理解を支援する生徒アシスタント (elevassistent) が配置されている。

特別高校の教育課程は国が定めた「国家プログラム (全9種)」(表1)と障害の重い生徒のための「個別プログラム」が策定されており、各学校で組み合わせて開講している。個別プログラムには芸術、家庭 (家政学)、スポーツと健康、自然と環境、個人と社会、言語とコミュニケーションの6つの領域内容が含まれることとされている。個別プログラムとしての職業訓練は一般労働市場への就労が可能な生徒を対象とし、職業プログラムを中心に学ぶ。各生徒には個別の教育プログラムが作成され、卒業後はサポートを受けながら一般企業で働くことをめ

表1 特別高校の国家プログラムの一覧

①管理、貿易および商品の取り扱い
②芸術
③不動産、建設、建築
④車両ケアと商品取り扱い
⑤工芸と生産
⑥ホテル、レストラン、ペーカリー
⑦健康、ケア、看護
⑧社会、自然、言語
⑨森、土地、動物

スウェーデン教育庁ウェブサイトより作成

<https://www.skolverket.se/undervisning/gymnasiesarskolan/laroplan-program-och-amnen-i-gymnasiesarskolan/gymnasiesarskoleprogrammen>

ざす。

個別プログラムとしての活動訓練では一般労働市場への就労困難な生徒（中重度知的障害）を対象とし、卒業後はデイケアセンター等の活動に参加する。

特別高校生徒数の推移を示したのが図 1 である。特別高校生徒のうち 58%がナショナルプログラム（職業訓練プログラム）、42%が個別プログラム（個別プログラムとしての活動訓練）を履修しており、またナショナルプログラムにおいては「ホテル・ツーリズム」「行政・商業・経営」等のコース・プログラムの人気が高い（図 2）。

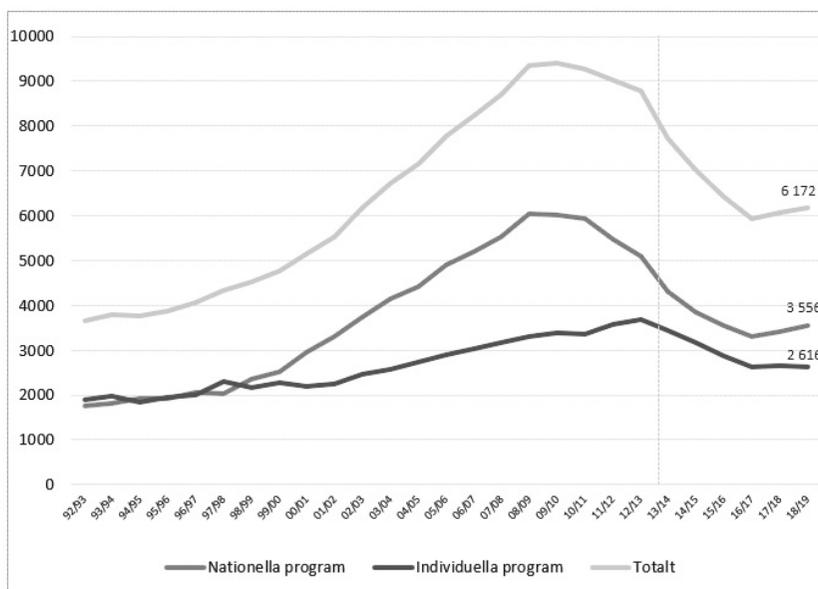


図 1 スウェーデンの特別高校在籍生徒数の推移 (スウェーデン特別高校統計)

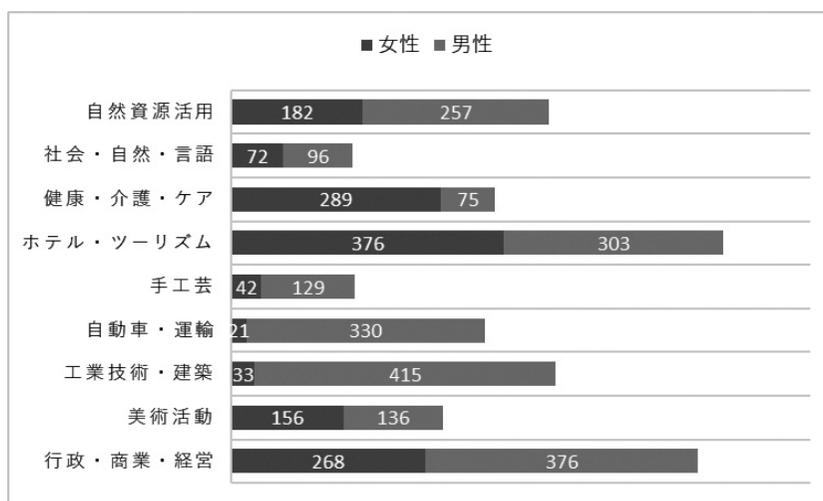


図 2 2018/19年度の特別高校の生徒数 (スウェーデン特別高校統計)

3. 聖エリク特別高校 (S:t Eriks Gymnasiesärskola) の概要

スウェーデンの首都ストックホルム市にある聖エリク特別高校は、公立の聖エリク総合制高校 (S:t Eriks gymnasium) に併置されている (写真1)。学校はストックホルム市内の中心部にあり交通の便が良いので、自力登校する特別高校生徒にとっても便利な場所にある。



写真1 聖エリク特別高校の校内の様子 (ウェブサイト)

今回の訪問調査においてインタビューに応じていただいたのは副校長のダニエル氏とジェニー氏である (写真2)。聖エリク総合制高校と聖エリク特別高校には合わせて約1,400名の生徒が在籍し、「普通科 (生徒数約1,200名)」「特別高校 (生徒数約150名)」「成人教育 (生徒数約30名)」の3部門に分かれている。

聖エリク総合制高校の普通科には知的障害を伴わない肢体不自由生徒も約25名在籍し、彼らの多くは寄宿舎を利用している。普通科には大学進学準備プログラムと職業訓練プログラムが置かれており、またソーシャルワーカー・心理士・学校看護師・特別教育家らが「生徒チーム」を組織し、生徒の家庭・生活状況等も含めて丁寧に把握・対応を行っている。



写真2 聖エリク特別高校のダニエル副校長 (左) とジェニー副校長 (右)

聖エリク特別高校への進学条件としてIQ70以下であることが国の基準で定められており、聖エリク特別高校の生徒の多くは知的障害特別基礎学校から進学してくる。教職員数は約100名である。2013年以降、特別高校教師は「特別教育家」の有資格者と義務づけられているが、資格取得期限は2018年から2023年に延期され、実際には特別教育家の資格を全員が保有できていない。

教育目標は「すべての生徒のニーズと希望が可能な限り導かれ、質の高い教育を提供すること」であり、生徒の状況・ニーズに応じてナショナルカリキュラム（3分野）と個別カリキュラム（6分野）を選択し、必要に応じてインターンシップも設定される。これらのプログラムのために保障される時間は4年間3,600時間であり、個々の課題や支援ニーズに応じた教育によって彼らの発達を支援していく。通常の高校と異なる点は「留年」がないことと、大学進学資格を得ることができないことである。

いずれのプログラムも職業とさらなる学びの双方に適した基盤の提供と、社会生活に積極的に参加していくための学びが重視され、各プログラムは表2のように設定されている。ナショナルプログラムのなかでは「語学／社会科学／自然科学プログラム」の人気の高い。その理由として「通常の高校生と同じように勉強したい」という気持ちが強いことが特徴的であり、在籍している生徒のニーズが示されている。

表2 聖エリク特別高校のナショナルプログラムと個別プログラム

	ナショナルプログラム	個別プログラム
クラス人数	1クラス12名	1クラス5～8名
スタッフ	担任1名、アシスタント1名以上	担任1名、アシスタント1名、補助3名
内容	<u>3分野</u> ・語学／自然科学／社会科学 ・手工芸（木工、フラワーアレンジメント、理容） ・美術（図工、ダンス、演劇）	<u>6分野</u> ・スポーツと健康 ・家庭と消費者の知識 ・美術・芸術 ・言語とコミュニケーション ・自然と環境 ・個人と社会



写真3 ナショナルプログラムにおける美術活動（聖エリク特別高校ウェブサイト）

3・4年次には個別カリキュラムとして週2～3日の実習・インターンシップが行われている。実習・インターンシップ先は専攻に関連する職場が優先されるが、多くの生徒はスーパー

や工場等での実習を行っている。ストックホルム市全体では1,200名が特別高校に在籍し、その半数（3・4年生）の600名が実習・インターンシップの対象となる。

しかしダニエル副校長によれば、実際には150名程度しか実施できていないという。その背景として、実習・インターンシップの予算の問題や「知的障害生徒への対応がわからない」という理由で断られるケース、移民労働者の参入の増加などが挙げられる。それゆえに教師たちは、企業や社会に向けて学校や生徒のことを発信する理解啓発の活動にも力を入れている。

さて、ストックホルム市では2019年と2020年に聖エリク特別高校生徒に対して調査を実施している。2019年調査では回答した聖エリク特別高校の生徒の約91%が学校に対して概ね満足と回答しており、教師の説明の分かりやすさ（「はい」75%）や「先生はあなたが学校でもっとうまくできることを話してくれますか」への肯定が74%回答され、丁寧な教育を受けていると捉えている生徒の様子がうかがえる。他方、「卒業後に何ができるかを学校から学べるか」に対しては「はい」63%、「いいえ」37%と回答されたほか、「あなたがどのように働きたいかについての提案があれば教師は耳を傾けるか」については「はい」61%「ときどき」30%であり、卒業後の進路や移行支援に関する生徒のニーズに対応していくことが課題の一つであると考えられる（Stockholms stad：2019）。

4. 聖エリク特別高校の取り組みの特徴

学校の日課は8時15分～15時（金曜日のみ14時15分）であり、公共交通機関または福祉タクシーを利用して通学している。昼食の時間は総合制高校とずらして設定され、特別高校の生徒たちが落ち着いて食事ができるように工夫されている。各教室も生徒の実態に応じて工夫がなされ、例えば生徒が行き交う廊下に面したドアはスモークガラスにすることで、生徒への刺激の調整が行われている（写真4）。

スヌーズレンや感覚統合を行うことのできる教室も設定されている（写真5・6）。そのほか、調理実習ではデジタル教材と紙媒体の教材の双方を活用することで生徒のニーズに応じた対応がなされていた。デジタル教材では、グループホームや高齢者向けにわかりやすく作成された調理レシピアプリが利用されている（写真7）。



写真4 教室の様子

教師は「生徒の自信がどのように育ち、また人として成長・発達していくのを見られること」に特別教育の醍醐味を感じており、個々の生徒のニーズ把握や自立に向けた発達を支援するために細やかな配慮を行っていた。また、同校は通常の高校と併置されている点も特徴的であるが、授業以外にも昼食・行事等で生徒同士が顔を合わせる機会が多くあり、自然と交流機会が生まれている。



写真5 スヌーズレンのある部屋



写真6 感覚統合を行う教室



写真7 調理レシピアプリ



写真8 聖エリク高校・聖エリク特別高校における昼食

聖エリク特別高校生徒に通学、学習状況、実習・インターンシップ、卒業後の進路について直接インタビューする機会を得られた（写真9）。Aさんは地下鉄を利用して通学しており、卒業後は裁判所内のカフェに就職が内定している。Bさんは職場実習を先日終えたところであるが、すでに就職が決まっており「早く就職したい」と卒業が待ち遠しい様子を嬉しそうに語っていた。他にも、生徒の声として「重要なことが学べる」「学校に通っている多様な友人と知り合うことができる」ことが挙げられていた。

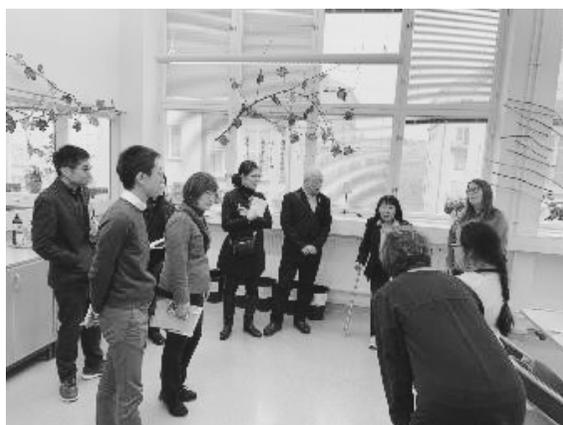


写真9 特別高校生徒のインタビューの様子

聖エリク特別高校の教育目標として卒業後の就労が重視されているが、現状としては前述のように実習・インターンシップさえも困難なことから就労はかなり困難であり、卒業生の多くはデイケアサービスとなっている。スウェーデン全体でも特別高校の卒後の進路として一般就労は僅か5%にとどまり、社会の受け皿がないことで居場所を失い、非行・犯罪に繋がる若者の存在も懸念されているとダニエル副校長は語る。また、特別高校で設定しているカリキュラム（職業関係コース）の内容が、就労に直接的に繋がらない状況も語られた。今後、カリキュラム内容の見直しの必要性も推察された。

Luthra, Högdinら（2018）は、2001年から2011年の特別高校卒業生12,269人のうち教育・

雇用・日常作業活動のいずれにも参加できていない若者が2,955人（24.1%）にもものぼることを明らかにしている。また83.5%が2011年の段階でLSS（障害者福祉支援サービス）に一切繋がっていない現状も合わせて指摘している。

そのほか、国の基準によりIQ70以下の知的障害生徒が特別高校の対象となるため、境界域の生徒や発達障害等の生徒は通常の高校に在学している。そのような生徒が高校で適切な理解・支援を得られずに苦勞していることは十分に想定され、彼らの支援のあり方を見直すことも重要な課題の一つとされた。



写真10 インタビューの様子



写真11 インタビュー終了後に聖エリク特別高校にて

5. 高校生の声から探る知的障害特別高校の課題

いくつかの先行研究では生徒の声から知的障害特別高校の課題が検討されている。Molin (2004) は特別高校生徒を対象に参与観察を含めたインタビュー調査を実施し、その大多数が特別高校に通うことを前向きな経験と認識していたが、特別学校から積極的に距離を置きたいと考えていた生徒のグループでは特別学校に通うことを「普通の生徒」としての自分のイメー

ジに対する脅威と見なしていた。

Mineur (2015) は特別高校に在籍する知的障害生徒計 26 名（男子 12 名、女子 14 名）にインタビュー調査を実施しているが、知的障害生徒は「この学校は“普通の”学校よりも良いと思う。“普通の”学校はストレスが多く、ペースは速い。ここでは自分のペースで物事を行うことができ、それは私にとって良い気分」「前の学校でいじめられていたので、ここに来たときは一人でいたかった。でも、ここでは安全を感じて私は成長し、自信がついた」など、特別高校に通うことで自身の障害に対する認識が変わり、特別高校では個別の教育的ニーズへの調整が行われたため、生徒は学校での困難にそれほどつまづかなくなったと述べている。

特別高校における前向きな社会的関係と教師からの支援によって、大人として自立・自律した生活への移行に必要なサポートを得ることができていたが、一方で知的障害生徒は高校との違いを認識し、特別高校に在籍する自分に確信が持てなかった。「特別な生徒」に分類されることは、特別高校以外の生徒との関係において「他者・別」感覚があると強調して回答しており、他者からの偏見や教師の要求が低く、「特別高校は高校よりも子どもっぽく感じる」という認識によっても確認されている。

Mineur (2015) は、特別高校に通う知的障害生徒は自分たちが受けている教育を主流の教育システムよりも価値が低いものと認識し、この問題は特別高校の教育が高等教育進学に必要な資格を提供しないということにも関連していると指摘する。これは特別学校に係る排除の問題の例示でもあり、特別高校がスウェーデンのインクルーシブ教育や「A School for All」のビジョンと一致していないことを示唆している。それゆえに特別高校が、知的障害を有する高校生の学びの場として最適な場となり得ているのかどうかについて検証が不可欠である。

同様に Luthra, Westberg ら (2018) は特別高校の卒業生 10 名 (21 歳～31 歳、男性 5 名、女性 5 名) にインタビュー調査を行っているが、回答者の多くが「フルタイムで働いていてスケジュールや時間を管理する難しさ」について言及しており、一方、福祉サービスとしての「日常生活作業」は彼らには簡単すぎる内容のため、特別高校生徒に適した卒後の進路が社会に保障されていない問題を指摘している。また 9 人がもっと学びを続けたいとも回答しており、実際にこのうち 6 名は特別高校卒業後に国民大学 (folkhögskola) や成人向けの特別教育に参加していた。また 6 人がうつ病、パニック不安、身体的損傷、精神的不調、自傷行為などの課題を抱えていると回答し、そのことが就労困難に影響を与えていると指摘している。

6. おわりに

本稿では 2020 年 3 月に実施したスウェーデン・ストックホルム市内にある公立高校に併置された聖エリク特別高校の訪問調査を通して、スウェーデンにおけるインクルーシブ教育のもとでの知的障害特別高校の取り組みとその意義について検討した。

スウェーデンの知的障害特別高校の教育は大人の生活への準備期間として位置づいており、知的障害がある子どもにとって進路選択は容易ではないため、知的障害特別高校は通常高校よりも 1 年長い 4 年間の修学年限が保障されている。

聖エリク特別高校では、他の特別学校のように落ち着いた環境のなかで生徒の状態や学習ニーズに応じたプログラムが実施されていた。また通常の高校と併置されていることで相互交流や理解を通して成長・発達の機会が提供され、インクルーシブ社会に繋がる教育が行われて

いた。しかし、特別高校では就労をめざした教育プログラムが実施されているものの、それが卒業後の進路・就労に繋がっていない現状が大きな課題である。

また Mineur (2015) が指摘するように、特別高校に通う知的障害生徒は自分たちが受けている教育を主流の教育システムよりも価値が低いものと認識し、この問題は特別高校の教育が高等教育進学に必要な資格を提供しないということにも関連している。これは特別学校に係る排除の問題の例示でもあり、特別高校がスウェーデンのインクルーシブ教育や「A School for All」のビジョンと一致していないことを示唆している。それゆえに特別高校が、知的障害を有する高校生の学びの場として最適な場となり得ているのかどうかについて検証が不可欠である。

【附記】 本調査研究の遂行においてスウェーデン・ストックホルム市在住の佐々木瑞子氏(コーディネーター・通訳) より多大なる協力支援をいただいた。記してお礼申し上げる。

文 献

- Frithiof, E. (2007) Mening, makt och utbildning delaktighetens villkor för personer med utvecklingsstörning [Meaning, power and education: Preconditions of participation for persons with learning disabilities] (PhD dissertation) . Växjö University, Sweden.
Gymnasiesärskola.se : S:t Eriks gymnasiesärskola i Stockholm.
<https://www.gymnasiesarskola.se/skola/stockholms-stad/s-t-eriks-gymnasiesarskola/#>
- 本所恵 (2016) 『スウェーデンにおける高校の教育課程改革－専門性に結び付いた共通性の模索－』 新評論
- Luthra, R., Högdin, S., Westberg, N., Tideman, M. (2018) After upper secondary school: Young adults with intellectual disability not involved in employment, education or daily activity in Sweden. *Scandinavian Journal of Disability Research*, 20 (1) : 50-61.
- Luthra, R., Westberg, N., Högdin, S., Tideman, M. (2018) ‘Just because one has attended a special class does not mean that one isn’t capable’: the experiences of becoming and being not involved in traditional occupations for young people with intellectual disability. *Nordic Social Work Research*, 10 (4) : 330-342.
- Mineur, T. (2013) Skolförmåns komplexitet elevers erfarenheter av skolvardag och tillhörighet i gymnasiesärskolan [The complexity of a special type of school students’ experiences of every day life and sense of belonging in upper secondary schools for students with intellectual disability] (PhD dissertation) . Örebro University, Sweden.
- Mineur, T. (2015) Swedish education in upper secondary schools for students with intellectual disabilities: from a student perspective, *Research and Practice in Intellectual and Developmental Disabilities*, 2:2, 165-179, DOI: 10.1080/23297018.2015.1067866
https://www.tandfonline.com/doi/pdf/10.1080/23297018.2015.1067866?casa_token=Mqz65_24xYcAAAAA:PTpVgc8LNJ3VzFwCaeCKU-CrrEKpalubwr0jRoK579NExVWvTVZ3pBXsQtTuqB4DNsAjA2VQM7HwDFs
- Molin, M. (2004) Att vara isärklassad om delaktighet och utanförskap i gymnasiesärskolan [Being in special class about participation and exclusion in the upper secondary schools for students with intellectual disability] (PhD, dissertation) . Linköping University, Sweden.
- Molin, M. (2008) Delaktighet i olika världar om övergången mellan gymnasiesärskola och arbetsliv [Participation in different worlds the transition between upper secondary school for students with intellectual disability and work life] (Report 2008:01) . Trollhättan: University West, Sweden.
- Stockholms stad. (2019) Elevenkät Gymnasiesärskola 2019.
- Stockholms stad. (2020) Brukarundersökning inom funktionshinder 2020.
- Sveriges Riksdag :
https://www.riksdagen.se/sv/dokument-lagar/dokument/svensk-forfattningssamling/skollag-2010800_sfs-2010-800
- Swedish Statute Book. (2010:800) . Skollag [The Swedish Education Act] . Stockholm: Ministry of Education and Research.

- 高橋智・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・石井智也・能田昂・柴田真緒（2018）スウェーデンの高校教育とインクルーシブ教育－ダーラナ県の総合制高校特別教育プログラム・特別高校の調査から－、『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第69集、pp.35-43。
- 竹本弥生・安田佳世・高橋智（2014）「課題校」と称される公立高校における配慮を要する生徒の発達支援と「特親クラス」の実践－すべての生徒の学びと中退ゼロをめざして－、『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第65集、pp.133-146。
- 竹本弥生・青野路子・三枝あゆみ・田部絢子・内藤千尋・高橋智（2016）「多様な困難を抱える高校」における特別支援教育の課題－卒業生・保護者・教師の面接法調査を通して－、『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第67集、pp. 69-79。